



わかば

2021. 1. 30
(令和3年) 第20-37号

文責 校長 保谷 力

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

教育目標 「帰国後、日本の教育に円滑に適応できるよう、日本の学校における学習指導要領に沿った国語、算数(数学)の学力の維持、併せて生活・生徒指導を行う。」

重点目標 一人一人の笑顔輝く学校づくり～期待登校・満足下校～



校長 保谷 力

早いもので立春も間近となりました。立春は二十四節気の第一番目に来る節目です。こう考えてみると、暦の上ではもう春になります。コロナの終息とともに真っ青なオレゴンの大空を早く眺めたいと思っています。保護者の皆様には、日頃より学校運営にご理解・ご協力いただき感謝申し上げます。

さて、今週も中等部3年生にスポットをあて、中国の作家魯迅の「故郷」の学習を終えた子供たちの感想文を掲載いたします。世の中のIT化が進む中で「文字を書く」という行為は、とても重要になっているのだと感じています。「書ける」ことは「思考する」につながる大切な行為なのです。

「故郷」魯迅の小説を読んだ感想文

中等部3年生は「故郷」(魯迅作)を読んで、様々な思いや感想を寄せてくれました。今回は4名の読書感想文を掲載いたします。

※魯迅は中国の小説家、思想家で「もともと地上に道はない」などの名言を残した人物としても知られています。「故郷」は、魯迅の代表作ともいえる短編小説のひとつで、中学3年生の教科書に載せられています。主人公「わたし」は、魯迅本人の経験が基になっているそうです。(校長)

「故郷」

中等部3年 ブラインズ 新生

故郷を読んだきっかけは学校の国語の授業だった。「故郷」という単元は、中国社会の現状を「主人公私の友人関係の崩壊」と言う悲劇によって表現した魯迅の作品である。

この内容は、私(迅)が故郷に二十年ぶりに帰るところから始まる。私が故郷に二十年ぶりに帰って来たのは、私が今暮らしてるところに母と甥のホンを連れて引っ越すためだ。

故郷に帰って、私は母からルントウのことを聞いた。ルントウが来るそうだ。その時、私は脳裏にルントウとの記憶が蘇った。このように思い出が蘇ったことに、私はやっと故郷を美しいと思えた。その後ホンと話していると、昔「豆腐屋小町」と呼ばれていた豆腐屋のヤンおばさんが現れ、私を金持ち扱いする。私の帰郷は、親戚の対応に追われながら四、五日潰れた。そしてある寒い日の午後、ルントウと水生(シュイション)が来た。ルントウは私の記憶にいるルントウとは違ったが、すぐわかった。そして一こと言った

「ああ、ルンちゃんよく来たね」

続いて言いたい事がたくさんあったが、口からは出なかった。そしてルントウは、はっきりと言った。

「旦那様」

その言葉に二人の間に厚い壁が出来たかのように感じた。ルントウが水生を紹介する。それはまさしく三十年前のルントウと同じで、彼はホンルと仲良くなり遊んだ。

九日後、私は母とホンルを連れて旅立った。ホンルが、「僕達いつ帰って来るの」と聞いた。私と母は胸を突かれる。故郷は遠ざかるけどまったく名残惜しくなかった。もともと希望はあるかないかなんて言えない。それは地上の道みたいなものだ。

「もともと地上に道はない。歩く人が多ければそれが道になるのだ。」

私が一番動かされたところは、ルントウと主人公迅（シュン）が会ったところだ。私はこのところを読んだ時、迅の気持ちになって考え凄く悲しくなった。やっと故郷を美しいと思えたのに、この一言で迅の中にあった故郷を美しいと思える気持ちが一瞬でなくなった。しかし、ルントウは、仕方がなくあのような態度を取ったのかもしれない。迅が言って欲しくてもルントウが言いたくても周りの人たちが許さない。この時に社会常識では身分が違う人同士が対等に同じ立場で会話する事が難しかったからだ。子供の頃は社会常識とか余り知らず普通に話していたのかもしれない。

もう一つ心を動かされた言葉は、ホンルが言った言葉だ。

「叔父さん、僕達いつ帰って来るの。」

「だって水生が僕に家に遊びに来いって。」

だ。これは昔迅とルントウの関係だったからだ。もしも故郷に戻ったら、水生（シュイシュン）とホンルが今のルントウと迅の関係になるかもしれない。だから迅はホンルに、私たちが経験しなかった新しい生活を持って欲しいと思ったのだろう。

私はこの単元を読んで、当時の中国の状態、社会常識や現象を少し理解したように思う。当時は凄く大変だと分かった。色々な人が悲しんだり、怒ったり、何も感じなかったりと色々あったと思う。

最後の文章の「もともと地上に道はない歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」がとても良い言葉だと思う。作者は一つ一つ少しずつ新しい中国(社会)を作って実現させようとしているのだと思う。



「故郷」を読んで

中部部 3 年 吉田 健悟

私は、故郷を読んで、未来に対する不安や自分が周りからどう見られているかについて恐怖を感じた。

私は、故郷の中における主人公の他人任せ、無責任な考えに嫌悪感を覚えた。なぜなら、主人公は、ルントウの境遇を知って悲しみ、ルントウとの心の距離が離れていることに落胆しているが、母の口からルントウの名が出るまでルントウとの思い出すら忘れていた。ルントウとの心の距離が空いたのは、手紙を定期的に送り続けるなどの行動を起こさずにいた主人公の問題だと考えた。そしてこれは、私自身にも言えることで、私もこのようなことに対する自分に自信がない。その上に自分に甘い。私は自分の意見や感想を伝えたりするのに恐怖を感じることもある。また人と話す場合、何も意見を出さないのにも自責の念を覚える。私は、普通でありたいと強く思ってしまう。しかし、自分に伝えたい事があると、喋らずにはいられない。後先考えずに行動するため、あとから後悔する。

私は、故郷に出てくるヤンおばさんのように周りから厄介に思われているのだろうか考える。ヤンおばさんのように物を盗むことはないが、身勝手な行為（周りの興味がない話を延々と話し続ける事など）をしてしまうという意味では一緒だと思った。

私にとって故郷を読むことは、自分の欠点を見つめるという点で有意義だったと思う。

「故郷」

中学部3年 山崎 玲奈

私は故郷を読んで、当時の中国は、身分の差による差別が激しかったと理解した。なぜならば、主人公が他の人から差別されたからだ。主人公は、知事様であり身分があるから他の身分の低い人から差別を受けていた。その理由により彼は故郷に帰ったとき、知り合いや親友から差別を受けるはめになったのである。

主人公は最初故郷に帰ったとき、故郷は変わってしまったと思った。彼の記憶にある故郷は、もっと美しい気がしていたらしい。けれども、その故郷の風景は、言葉で言い表わせなかった。そこで主人公は、故郷は変わってしまったのではなく、自分の心境が変わったと自分に言い聞かせる。しかし、彼の母親がルントウと名のる幼い頃の親友のことを、主人公の頭の中で彼との楽しい思い出が浮かび上がる。そして、彼の故郷の見方が変わる。

しかし、主人公がルントウと実際会うと、ルントウは、主人公のことを旦那様扱いする。なぜならば、ルントウと主人公には大きな身分の差ができてしまったからだ。ルントウは主人公と違って苦しい生活を送っていて、金もろくに稼げない状態だった。子供の頃は、お互い自分の立場を理解していなかったため、彼らは一緒に仲良くなれたが、大人になって自分の身分に気づいたのだろう。私は、身分の差があるだけで差別されることはとても悲しいことだと思う。なぜならば、誰もこのような友情の結果は望んでいないからだ。ルントウや主人公も、このような結果を望んでいなかったと私は思う。

主人公は昔の親友だけではなく、昔お世話になったヤンおばさんからも身分の差別を受ける。ヤンおばさんは、すべての道具を彼女に渡すことを頼んだが、主人公は断る。道具を売り、金を稼ぐためだからだ。その時、ヤンおばさんは、主人公は知事様になってもお金持ちではないことを疑問に思い、主人公を問い詰める。彼女は、身分の高い人は金が手に入れば他の人に渡さず、もっと貯めていくと決めつける。私は、当時の中国で身分の高い人が、貧乏人に違う扱いをされているのは理解できた。なぜならば、貧乏人と金持ちの人は違う生活をしているからだ。

当時の中国の身分の高い人たちは、貧乏人から金を取っていると私は思う。ルントウは、作った物を売ると何度も税金を取られて、世間は物騒だと証言している。この頃中国には問題があったと思う。そして魯迅はこういう邪悪な中国の社会を変えるために小説家になったと私は思う。その魯迅の思いが最後の段落に示されている。



「故郷」 を読んでの感想

中学部3年 志手 陽向子

私は、中国の話は今まで一度も読んだことがなかったので、この魯迅の「故郷」はとても新鮮であった。私は9月に日本から転入してきたため、話の途中から授業を受け始めたが、風景や登場人物の心情、動作や様子などが細かく表現されていたため話が頭に入りやすく、読んでいて私もこの話に引き込まれるような気持ちになり、とても読みやすかった。

この単元で、私は、昔の中国で人々が身分の差によって貧富の差がとても激しかったということを学んだ。私は、身分のある世界よりも、今のような平等な社会の方が、みんなが幸せになることができ、暮らしやすいと思う。何よりも、お互いがお互いのことを思いやって行動し、高め合って生活していくことが大切だと思う。そうすることで、ルントウのように大切な家族や親戚と息苦しく生活をせず、楽しく暮らすことができるだろう。

今回、私は次の二文にすごく感動を覚えた。それは、最後の ” 思うに希望とはもともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。 ” ” 歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。 ” という二文だ。これは、希望とは小さな努力を少しずつたくさん積み重ねることで、叶えることができるという意味だと私は思った。 私は、日本からアメリカに来てまだ間もないため、正直、不安や周りについていけないことが多い。だからこそ、今後はもっと自分からいろんなことに挑戦し、努力をたくさん積み重ねて、未来への希望の道を切り開いていくことが大事だと考える。